

# 河瀬春太郎

かわせ はるたろう

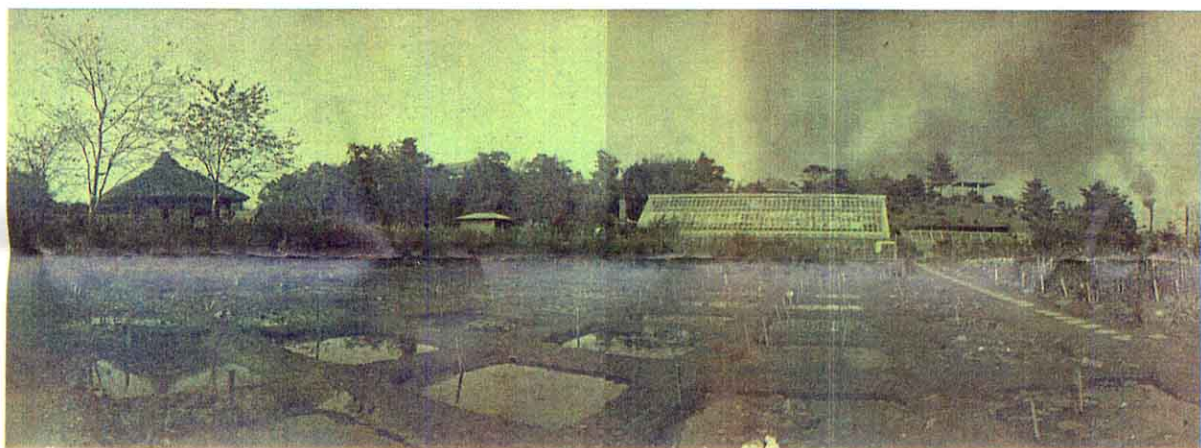
## 一万坪の花畑『妙華園』を開設した謎に満ちた人物

### ワシントンに贈る桜の苗木を選別

毎年、春になると決まってニュースに登場するワシントンの桜が、日本からの贈り物だということは、だれもが知っているとおりである。しかしその時代や、これに携わった人々など、贈られたいきさつについてはほとんど知られていない。

桜が海を渡ることになるそもそものきっかけを作ったのは、日本に何度か滞在し、人力車旅行についての著書もあるアメリカ人ジャーナリストのエリザ・R・シドモアという女性だった。エリザは明治四十二年（一九〇九）に帰国すると、タフト大統領夫人に会い、「ポトマック河畔に造られる予定の公園には、ぜひ桜並木を」と進言する。これが、かねてから「バドソン河畔に桜並木を」という陳情を続けていたニューヨークの在留邦人たちの知るところとなって、計画はひとつにまとめられ、急速に具体化していったのである。総領事、駐米大使らも協力して、「両国親善のために、ぜひ日本から苗木を寄贈してほしい」との考えを外務省に伝えた。これに応じて外務省は『桜樹寄贈方促進』を決定、正式に東京市に申し入れた。

当時の東京市長だった尾崎行雄のあつせんで、早速桜の苗木十種二千本が贈ら

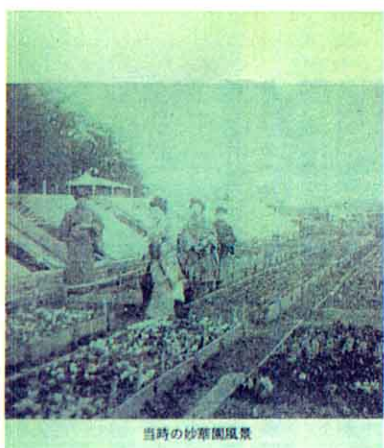


れた。ところがシアトルでの陸揚げの際に、害虫や種々の細菌類が発見されたため、一本残らず焼却されるという憂き目にあつた。しかし、これを無念に思った人々の熱意により、桜は再度送り出されることになる。最初に苗木を出荷した東京農園からは、一千本の苗木を寄贈する申し出があり、植物病理や昆虫学の専門家の協力を得て、育成の観察が行われた後、一本一本厳選された苗木が贈られたのである。こうして、三年後の大正元年（一九一二）には無事ワシントンにおいて植樹祭が催される運びとなつた。ワシントン市からは、返礼としてハナミズキの苗が送られてきた。在来種と区別するためにアメリカハナミズキと呼ばれたこの木は、現在も日比谷公園と国会議事堂に見ることができる。

さて、この二度目に桜を贈った際に、苗木の選別をしたといわれるのが、当時手広く洋花栽培の事業を行っていた『妙華園』の当主、河瀬春太郎であつた。

### 妙華園の洋花栽培と人々に見せる工夫

妙華園は、現在のJR東日本スポーツプラザとJR家族寮独身寮を含めたあたり（西品川一、二丁目）で、三ッ木村あるいは苗木原と呼ばれた人里離れた場所



当時の妙華園風景

にあり、広さ五千坪とも一万坪ともいわれた園芸場であつた。当時このあたりの環境は、メロンが特産品として栽培されるほどで、園芸に適していた。妙華園の名は、隣り合っていた寺院、妙光寺にちなんで付けられたという。

妙華園が広く知られるようになったのは、ここが珍しい花々を栽培するだけでなく、ほかにもさまざまな施設を完備し、入場料を取って客を集める、今でいう遊園地のような性格の場所だったからである。この趣向が当たり、妙華園は一時、向島百花園をしのぐ東京名所として人々に親しまれた。

丸太造りの門を入ると、右手には熊や猿などの檻の並んだ小動物園があり、左には孔雀や七面鳥の鳥小屋があつた。園内にはダリアを始めとする西洋草花や、ツツジなどの灌木類が集められ、広い花

畑のほかにも四棟の温室と二棟の陳列室があり、四季折々の花を咲かせるよう工夫されていた。また牡丹や藤を一月下旬から開花させるなど、促成栽培の技術研究がすばらしく、中でも園内つきあたりにあった池で栽培されていた睡蓮は有名だった。園内の花にはそれぞれ、アルファベットだけでつづられた名称札が付けられており、これもモダンで人目を引いたという。ここには、見習い生を集めて新しい種苗や園芸栽培の技術を教える指導所や、地方の熱心な園芸家たちのために通信販売をする設備もあった。外国の種苗商との取引も盛んに行われ、生産された生花は銀座そのほかの町々で販売された。ほかにも園内には、池や泉、築山、運動場、飲食店などがあり、ブランコなどの遊具も備えられていた。明治末から大正にかけては、城南小学校を始めとする学校の子供たちの遠足地としてもよく利用された。春祭りには、数万人もの人出があったといわれる。

品川小学校の近くに住んでいた東京市

長、尾崎行雄は朝夕愛馬にまたがり、妙華園内をひと巡りするのを日課としていた。そんなことが縁で、ワシントンに贈る桜の苗木の選別が、春太郎に任されることになったと思われる。

## 河瀬春太郎の謎解き

ではいったい、このような斬新でスケールの大きな栽培場、私設公園を開設した春太郎とは、どんな人物だったのだろうか。

河瀬春太郎、明治五年（一八七二）、河瀬秀治の長男として生まれる。ほかに支那、よね、キシの三人の妹があった。父秀治は士族の家に生まれて、武蔵（品川）、小菅、印旛、群馬、熊谷の各県知事を歴任した人物であった。その後、豪州メルボルンをはじめとする各国博覧会の事務局長となって欧米に渡ること数回わが国の産業の発展に尽くした。実業界に転じてからは、岡倉天心、フェノロサらと日本美術の復興に努めたり、新仏教に帰依してその布教にはげんだりしたと

いう。

しかし、父秀治について書かれたものに比べて、春太郎のことを知る手がかりはあまりにも少ない。『品川警察署百年史』そのほかの本には、どれも「植物学を勉強するために明治十年（一八七七）アメリカに渡り、洋花園芸の技術を身につけて明治十八年（一八八五）帰国。明治二十八年（一九一五）に妙華園を開設した」と書かれているのみである。ここで不可解な点に気付く。明治十年といえは、明治五年生まれとされる春太郎は、わずか五歳だったことになる。財界名士の一人息子がその年で遠い外国へ渡ったという点も、さらに十三歳で園芸技術を修得して帰国したということも、にわかには信じ難い。妙華園の実績からすれば、留学して洋花栽培を学んだことはむしろ事実であろうが、年代表記に誤りのある可能性は大きい。これだけの大きな仕事をした人物でありながら、春太郎に関する詳しい資料が保存されていないことは驚くべきことである。しかしこれは、市井の人々に関する記録というものが重要視されなかった時代の感覚からすれば、そう珍しい例でもないのである。今野幾三郎氏らの研究者の方々によって、今後さらに研究が進められるよう期待したい。



工業地帯の急速な発展による工場煤煙の影響で、植物が育たなくなったため、敷地の大部分が十五万円という当時の大金で鉄道省（JRの前身）に売却されたのである。残されたのは敷地の奥、苗木原と呼ばれていたあたりの高台で、昭和四十年代まで苗木店として営業を続けていたという。丸太を打ちつけただけの簡単な塀で囲んだ、決して狭くはない苗木畑で、入口にはペンキで「苗木調整・妙華園」と書かれた畳一枚ほどのあるトタンの看板が揚げられていた。ひらけた明るい土地であったかつての苗木原には、その名のとおりに苗木畑が広がっていた。しかし新幹線の高架もできて日当たりが悪くなったためか、次第にその面積は減っていき、妙華園の看板も、いつのまにか見られなくなってしまった。

鉄道省は妙華園から購入した土地に、職員の制服などを作る縫製工場を移転させた。そこでは地元の主婦らが、今でいうパートタイマーとして縫製の仕事をしていた。そして、この工場のあたりを妙華園という地名で呼ぶ習慣が、その後もしばらく残っていたという。



ちなみに妙華園そのものも、開設から三十年足らずの大正十年（一九二二）には閉園されて、現在は跡形もない。京浜



\*エリザ・R・シドモアは後年スイスで亡くなったが、これを悼んだ日本政府の働きかけによって、母や兄の眠る横浜の外人墓地に埋葬された。